ＫＳＫＱ
イマージュ　2017年８月
1991年9月3日 第三種郵便物承認　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行

金滿里ソロ公演
A Solo Performance by Kim Manri
寿ぎの宇宙
Cosmos of Blessings
監修＝大野慶人
作＝金滿里

東京初公開

死者も生者も共にあるということを

現代社会にうつしだす　魂の集い

金滿里ソロ公演『寿ぎの宇宙』　10/13（金）～15（日）　d倉庫（荒川区東日暮里）

魂に導かれて

金満里

7月下旬はハードな、つまり充実した日々を過ごすこととなった。

7月23日には、一年前に相模原で起こってしまった赦すまじき施設障碍者大虐殺の受難者たちを追悼するデモが神戸で挙行され、２００名の人たちと一緒に神戸の主要なアーケード商店街をいくつも貫いて2時間歩いた。

一周忌に当たる7月26日は夕方から大阪梅田でアクションを企画し３００名近い多様な人たちが集（つど）って追悼の輪をつくり、その後、公園に移動して夜10時半まで想いを語り合った。

２０１１年3月の大震災での夥しい死者と、その翌年に立て続けに亡くなった態変旗揚げからの2名の役者。彼らとの語らいとして舞った『寿ぎの宇宙』であったが、そこに理不尽の極みとしかい言いようのない殺され方をした上に名前さえ明かされない19名を迎え入れてなくてはならない。

7月29日、朝9時50分発の新幹線に飛び乗り一路横浜へ。大野慶人先生に監修稽古を付けていただくためである。念のため述べておくと大野慶人先生は舞踏の巨人・大野一雄（２０１０年に１０３歳で没）の次男で、その途轍もない怪物的といってよい舞踏に監修を入れ自ら共演し全世界で繰り返し上演される作品として成立させておられた裏の立役者。お連れ合いの大野悦子さんはその作品を別の一面から支えていたスタイリストである。

稽古場である大野一雄舞踏研究所は、保土ヶ谷区上星川の崖のような急峻な斜面に建っている。今回、その直近まで車が侵入できず、段々の付いた道を車イスで進むこととなった。研究所に辿りつく数十メートル手前で段々が狭まって車イスのままでは進めなくなり同行の連れ合いが私を背負った。（この状況に、最初に大野研究所を訪ねた時の想い出が蘇る。それは１９９８年4月19日、私のソロ第一作『ウリ・オモニ』を創るためだった。最寄りの私鉄の駅まで大野一雄先生みずから迎えに来て下さり、その後を付いて上っていって全く同じ状況になったのだった。私を背負う連れ合いを先導して、恐れ多くも世界の大野一雄が私の車イスを抱えて運んでくださったのだった。この日も一雄先生が前を歩いているような気がした。暑さのせいの幻影だったとしても…）

慶人先生に付けていただいた稽古の詳細は語れないが以下のような感じ。魂の集いで、皆が揃ってくることの意味を出すような所作をここでひとつ入れなさい。今の時代に「ビリーブ」ということがどれほど困難でもやりきらなくてはなりません。最後に命の大切さを、こう、込めるのです。

大野一雄舞踏研究所と隣接するご自宅を訪ねるのは、一雄先生の訃報をきき朝一番に飛び乗って駆けつけた２０１０年6月のあの日以来、7年ぶりだった。「色々な意味で節目です」この言葉を何度も聴いた。

帰路、港の見える丘公園にある大佛次郎記念館の喫茶店で仕事をされている大野悦子さんを訪ね画像を元に衣装に関する助言など色々といただき、様々なことを語らい、そしてその日の夜10時に大阪に帰ってきた。

インタビュー

今、なぜ『寿ぎの宇宙』か

原点回帰～魂を表現する

―なぜこの作品を作ろうと思われたのですか。

金　2012年に、態変が存続の危機に追い込まれた時期があって。その年の公演もできないかもしれないという危機感が、その一年前ぐらいからあってね。絶対に、態変公演をやるぞ！ そうして自分のソロ四作目新作も、何が何でも作らんと！という危機感が原動力だった。

ソロ一作目の『ウリ・オモニ』のように、「魂というものをどう表現するか」というシンプルな問いに帰っていく作品を作りたい、と漠然と考えていた矢先に、3・11が起こってしまって…。

地震や津波に遭い、一緒に逃げながら片方は死に片方は生き延びる、というようないろんな体験記を読んでいると、どれひとつもおろそかにできないすごいドラマがあった。身を引き裂かれるような想いの中で、たくさんの、おびただしい数の人が亡くなっていったわけですよね。

その人たちの死を、私らがやっぱり背負っていかないと、と。残された者の使命を大きく感じないと。それは、福島の原発をひた隠しにしている政府のあり方を問うということと、一つの線でつながっていくものだと思うのよね。その線上にある命というもの、たくさんの、おびただしい数の魂というものを、呼び起こし、呼び覚まし、その声を聴きたい、というのが自分の中から出てきた。静かに眠ってください、そういうことではないな、と私は思っているんです。

「舞を舞うぞよ」
～死者の想いを負う覚悟

―作品に寄せた散文詩に「舞う」という言葉が使われています。どんな意味合いがあるのでしょうか。

金　3・11で亡くなったおびただしい数の人の想いを込める、そう覚悟を決めた、そういう作品として作りたいと思ったんですね。それで「舞を舞うぞよ」という言葉で締めくくった。死んだ人たちがほんとは何を思っていたのかはわからないわけで、それは生きてる者が勝手に思っていること。だからこそ、残された者の自己満足じゃなく、死んだ人の想いと同調しながら、調律師のように吟味して、非常に注意深く、その想いを手繰り寄せたい、それがこの作品で独自に表したいと思ったものなんです。静寂の中で死者とともにある時間を大事にしながら、後ろにも行かず前にも行かない、今の時間を淡々と。

―それを鶴で表現しようと考えたのは…？

金　丹頂鶴の持っている厳しさ、気高さ、というのがすごくこの作品のテーマにはぴったりくると閃いたの。だけど見たことなかったのよね。丹頂鶴って、極寒地帯に舞い降りる鳥でしょ。それでその姿を追い求め、北海道釧路湿原へ旅を決行した。

実際に丹頂鶴を見て、すごくインスピレーションが沸いて、よかった。白と黒と何とも言えない深紅、荘厳な感じがしながら、華美でもなく、悠久の時を生きているような悠然とした姿を、死者の魂とともに舞いたい、と。

その時に知ったんだけど、丹頂鶴は生涯一対の相手とのつがいでいくんだって。それも、ビックリした。

つがいの固定関係はどちらかというとどうでもいいんだけども、私の中で、人と人との関係性というのは、長い目で見ていかないと判らない。長い紐のようなもので、その紐っていうのはやっぱりもつれたり切れたり流されたりいろいろあるけど、それを手繰り寄せながら、紐を結んででも繋がれる人との関係性を大事にする。

丹頂鶴は、そんな人と長く付き合っていく上での誠実さを表しているところがすごいな、というのもありましたね。

避けてきた「祈り」

―今回の作品では「祈り」という表現も印象的です。

金　もともと態変の表現には「祈り」の要素というものがとてもある。だからこそ「祈り」と強調するのはやりたくない、としてきた。私の中で「祈り」って否定的に捉えていたところが

あって、「祈ってすむかよ！」「祈るぐらいやったら銃を撃てよ！」と。

でも3・11以降、「祈り」が必要なら、そこを引き受けていいんじゃないかと思えてきた。自分たちの身体の障碍というものから呼び起こさせる、地面を叩いて、ドアを叩いて、眠っているものを起こさずにはいられないような動き、そういうものはやっぱり「祈り」に集約される。この作品を上演する年に、ずっと一緒にやってきた福森が末期癌で亡くなったという事がありました。それまでに亡くなった多くの態変のパフォーマーたちも、弔って、一緒に起こす方へ回っていただこうと。生前彼らが舞台で演じた姿そのままをはっきり人形にして、そこに向かってお弔いをする、そういう形の祈りを、初めてこの作品でやることにしたんです。

「五体投地」～始まりも終わりも一人

―その「祈り」は劇団態変としての作品『ルンタ』（2014年）へもつながっていきました。そこで演じられた「五体投地」を形として表現したのは、この作品が最初だったんですね。

金　先にも言った「祈るぐらいやったら銃を撃て！」と（笑）いうのがあったけど、やっぱりそれは両面、おなじ意味だなと気づいたのよね、この作品作りで。「祈り」という行為の中で自分を撃つ、ということだと。

五体投地は特に壮絶な「祈り」なわけで、ああいうふうに祈りたいという気持ちはどこから起こってくるんやろう、という興味。それを自分が作品の中でやってみることで体験したい、という思いがあった。

祈るということは、無心になるということ。

救いを求めて祈るのではなく、ああいうふうに地面に打ち付けて、身体を全面的に捧げて、全身全霊打ち付けて祈る形をやって、尺取虫のように進んでいく。そういう行為の中で、神って何なのか、神はどこにいるのか、自分がどこにいるのか、ということも全部含めて吹っ飛んでいく瞬間がある。

五体投地をくり返していくことで、自己と対峙して、もっと大きな存在に自分が帰依していくような気持ち、最後は自分も何もかもなくなっていくような、粉々になるような感じというのがあって、それが一番理想なんじゃないかなという感じがしている。だから、「祈り」というのは、たった一人で行われるべき行為だと思っています。始まりも終わりも一人というのは人間の誕生と死にも言えることで、そこを五体投地は引き受けている行為だと思う。

つながりながら「個として立つ」

―最後に、今回の東京公演で伝えたいことは？

金　「個として立つ」、ということ。かといって他者を切り捨ててあるわけじゃなく。

全部につながって全部に影響していくくらいの「たった独り」を自分としては意識したいと思っています。

それはなぜかというと、やっぱり死という問題。

「相模原障碍者大虐殺事件」という最も憎むべき犯罪が起こってしまって。いつ自分も障碍者だということで殺されるかもしれないし、傍らで殺される人の死を見るかもしれない。この作品を作ったときとは、また違う危機感に晒されているのを感じています。そういうとき、命ということへの、一人ひとりの個人としてどういう態度が取れるか、ということがすごく問われている時代に来てしまった。

人間の相互不信に絡められながらも、そこを超えるたった独りでの這い上がり方というもので繋がっていける、個と全体が見えてくる、そういうものを舞台でやれたら本望です。（舞台写真　中山和弘）

態変がもたらすもの

貫成人

「今日、ベルンで革命が起きた」。

１９９７年８月、スイス、ベルンにおける、劇団態変《Departed Soul（死霊）》上演直後、興奮した観客はこう叫んだ。

だが、革命とは、被支配者が支配者を倒して実権を握ることである。態変はどのような意味で革命なのだろう。

１９９０年代は、「障碍者」パフォーマンスの黎明期だった。脊椎に障碍があるライモント・ホーゲが公演活動に乗り出し、イギリスでは、１９９１年、障碍者からなる「カンドゥーコ・ダンス・カンパニー」が設立された。それに対して態変は、１９８３年設立と、圧倒的に古いばかりではなく、その舞台哲学も、欧米カンパニーとはおおいに異なっている。

ホーゲは、歪んだ背中を強調しながら、舞台においた鉄棒で懸垂をしてみせ、カンドゥーコの下肢をもたないダンサーは、スケートボードを巧みに操って、健常者顔負けのスピンやジャンプを披露する。パラリンピックにおける走りや泳ぎ、あるいは高度な技が、時に、オリンピック選手よりも大きな感動を与えるのと同様、障害者のパフォーマンスは、健常者ダンサー以上の感動を与える。だが、それは、「身体能力において劣る」パフォーマーが、「健常者と同じこと」をやってのけたことに対する感動であり、賞賛だ。そこには、「恵まれない」存在に対する、健常者の「上から目線」が混じっていないとは言い切れない。

ところが、態変の舞台からえられる感動はこのメカニズムに回収されない。金満里は、ポリオによって、歩くことさえままならない。だが、異生物のようなレオタード姿で床を転がり、床を掻くように移動する彼女が、必死に腕だけで体を支え、あるいは、横座りになって「キメ」のポーズを取る。その瞬間、観客の前に出現するのは、通常ではありえない、崇高な輝きである。宙を「はっし」と睨む、金満里の強い目の光とともに、今まで、あたりまえと思っていた世界が一気に瓦解し、別の次元が垣間見える震えを観客は感じる。

同じような経験は、晩年の大野一雄も与えてくれた。一〇〇歳近くになり、車椅子で登場した大野は、僅かに動く右腕だけで、宙に何かを放り上げ、それをふたたび、手の平でつかむ。すると、なにもない空間に花が舞い、落ちるのが見える。全盛期の大野に比べればはるかに小さな動きなのに、それを見た観客は、滂沱の涙を禁じ得ない。大野ほど、踊りを愛した人はいない。だが、かれが望む動きはもはや実現し得ない。踊りへの欲望は、それが阻害されているからこそ、かえって強く、リアルに空間を満たすのである。

金満里はじめ、態変のひとびと、また、大野一雄が示すのは、健常者の舞台、また、欧米における障碍者カンパニーの通念とは異なる舞台哲学だ。バレエやモダンダンスなど、従来の舞台に登場したのは、「すぐれた技巧もち、美しく、強い」身体だった。観客はそれに感嘆し、憧れ、圧倒される。カンドゥーコなど、欧米の障碍者カンパニーを支配するのも、同じく健常者の美の基準であり、障害を持ったパフォーマーはそれに従うだけだ。

金満里、あるいは大野一雄は、その基準を根底から転覆する。かれらは、「健常者」の基準にしたがうのではなく、「健常者」によってはけっして実現しえない独特の美、ほんとうの真摯さ、固有の存在を舞台において実現する。それは、健常者がどんなに巧みに「演技」しても、けっして実現しえない。かれらの舞台に登場するのは、演技や技巧によって作られたものではなく、かれらの、人格や過去の

履歴、感情、感覚、身体などすべてを含んだ、かれらの存在そのもの、その人の「実存」だからである。

「健常者」には生み出しえず、「障害」者にのみ可能な美や存在を実現する作品は、２０１０年代、ようやく広く認知されるようになった。たとえば、コンドルズ主宰の近藤良平率いる「ハンドルズ」が、また、ヨーロッパにおいては、ダンステクニックを否定する、いわゆる「ノン・ダンス」の旗手ジェローム・ベルが、障碍者を用いた《Disabled Theater》によって、それぞれ、障碍者ならではの味わいをみせる舞台を実現する。写真の分野では、片山真理が、脚を切断した自身の身体を被写体にしている。こうした、国内外における、ジャンルを跨いだ最新の展開を、金満里と態変は、すでに１９８３年、すなわち30年以上前から実践していた。ひとえに、驚くべき事である。

しかも、２０１０年代、このような傾向が生まれた、その背景を考えると、金満里と態変がもつ、世界史的とすらいえる意味が迫ってくる。

現在、各地で「障碍者」アートが注目され、美の基準が変化した背景にあるのは、いわゆる「コンテンポラリー・アート」状況だ。「モダン」と「コンテンポラリー」は似て非なるものである。「モダン」は、語源的に「新しい」を意味し、「コンテンポラリー」は「同時」を意味する。「モダン」は、「過去に比べて新しい」のだから、過去との対照・比較が含まれるが、「コンテンポラリー」という時、意味されるのは、なにかが、それを語っている話者と同時に存在し、目の前にあることだけだ。現代ドイツを代表するダンス理論家ハンス・オーデンタールは、「ダムタイプも能も、同じようにコンテンポラリーだ」と言った。現在と過去の対比がないのだから、「新しいもの」も「古いもの」も等しく、同列に扱われる。

「コンテンポラリー」状況を生み出したのは１９８９年の冷戦終結だ。ベルリンの壁崩壊によって、自動車や家電などの生産工場が、先進国から旧第三世界に流出し、中国やロシアなど、資源大国の存在感が増す。それまで、先進国において芸術を支えていたのは、教養を持った中流市民階層だったが、生産業の旧第三世界流出とともに中産層が蒸発し、その一方、旧第三世界で大規模アートフェスティバルがひらかれる。たとえば、《モナ・リザ》を見るにはルネサンス期、雪舟を見るには室町時代についての教養が必要だったが、アートマーケットが全世界に拡散すると、このような教養を観客に期待することはできない。伝統的技法やジャンルへのこだわりは薄れて、ティノ・セーガルなど、ほとんどパフォーマンスと言っていい造形美術が登場する。また、ベネチア・ビエンナーレ、ドイツ・カッセルのドクメンタなど、「ポスト・コロニアリズム」や難民問題など、政治的色彩が強くなる。そして「多様性」が賞揚される。

「多様性」というときに念頭におかれるのは、男性優位社会で抑圧されていた女性やＬＧＢＴ。欧米中心主義が排除していた「アジア」「アフリカ」、そして「障碍者」だ。だが、「多様性」を尊重し、既存の秩序を「外国人」など「異物」に「解放」しようと叫ぶひとびとは、「標準」とされる自分たちこそ、「異物」とされる存在からみると異物であることを忘れている。

このような構図の欺瞞を暴露するのが、金満里ひきいる態変である。かれらは、健常者にはかなわない美を、その存在そのものによって実現する。そのかれらを見るとき、観客は不思議な「わななき」を感じる。それは、従来の「健常者」中心の視線がゆらぎ、同時に、自分たちが「異物」の側に転落する、その事態を前にした「わななき」だ。

態変は、ベルンでかれらのパフォーマンスを「革命」とよんだスイス人が思ってもみなかった仕方で革命的なのである。

ぬき・しげと　舞踊批評家

1991年9月3日 第三種郵便物承認　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行

『寿ぎの宇宙』公演　同時開催

『寿ぎの宇宙』東京公演期間に、同会場で開催する特別企画です。登壇は、能楽師として古典能に携わるとともに多分野の現代芸術とも精力的なコラボレーションをされている**津村禮次郎氏と、現代日本を代表する先鋭的な詩人であり、朗読パフォーマンスや映像作品、写真、オブジェなど様々な作品を手掛けられる**吉増剛造氏。二人の巨匠をお迎えし、ジャンルを超え、からだをテーマに三者が意見を交わす実験的企画。公演と合わせて、どうぞお見逃しなく！

シンポジウム
「動けるからだ、動けないからだ」

10月14日（土）15:30～17:00

登壇　津村禮次郎氏（能楽師）　吉増剛造氏（詩人）
金満里（劇団態変主宰）

司会　志賀信夫氏（批評家）

チケット　一般1500円
『寿ぎの宇宙』チケットをお持ちの方は1000円

定員　100名程度　要事前申込（劇団態変事務所へ）

金満里ソロ公演　『寿ぎの宇宙』

公演日程　2017年

10月13日（金）19:00　★1
10月14日（土）14:00 /（15:30シンポジウム）
10月15日（日）14:00　★2

受付開始は開演の60分前、開場は30分前
上演時間は約60分です

★公演後は、金満里とゲストによる
アフタートークを行ないます。
★1　13日ゲスト＝田口ランディ氏（小説家）
★2　15日ゲスト＝谷川渥氏（美学者）

会場　**d倉庫（東京都荒川区）**
東京都荒川区東日暮里6-19-7

チケット　［前売］一般 4000円
障碍者・介助者・シルバー（劇団扱いのみ）3000円
U22（劇団扱いのみ）2000円
［当日］4500円
※車イス席は席数限定・要予約
※受付は2階にありますが、会場にはエレベーターがありません。
車イスご利用の方は1階からご案内いたします。

チケット予約フォーム
HPからも入れます。

チケット取扱　①劇団態変　TEL/FAX　06-6320-0344
E-mail　taihen.japan@gmail.com

②Confetti（カンフェティ）　http://confetti-web.com/taihen
0120-240-540（平日10：00～18：00）

発行人：関西障害者定期刊行物協会／大阪市天王寺区真田山町２－２　東興ビル４F
編集人（返送先）：イマージュ　和田佳子　石川みき　小泉ゆうすけ　小林加世子　金満里　仙城真
〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路1-15-15
tel/fax 06-6320-0344　e-mail taihen.japan@gmail.com　定価50円

劇団態変　賛助会員制度（2017 年度）

新規会員／継続会員 へご協力お願いいたします！

劇団態変は、2012 年 4 月に賛助会員制度を設けました。行政からの補助金を受けず、身体障碍者である態変のパフォーマーが主体となり芸術創造活動を行っていくため、資金面でのご協力を市民の皆様にお願いする取り組みです。会員の皆様の力によって、様々な企画や稽古の場となるメタモルホールを維持し運営することができています。
現在、2017 年度の賛助会員を募集しております。

年会費制です

個人会員　　年会費　一口 5,000 円
法人会員　　年会費　一口 20,000 円

会員特典があります

・会員証発行
・劇団態変 公演映像ＤＶＤ進呈
（毎年１回 当該年の公演ダイジェスト映像）

個人会員：
チケット料金５００円割引（何度でもご利用可能）
法人会員：一作品 １名ご招待

入会方法

①郵便振替
同封の振替用紙に以下をご記入の上、お振込み下さい。
・お名前　・ご住所　・お電話番号（任意）
・メールアドレス（任意）

②ＰａｙＰａｌ
メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方は
ホームページよりご利用頂けます。
劇団態変ＨＰ→日本語ＴＯＰ→「賛助会員制度」に
お入り下さい。

劇団態変の活動へのご支援を、
何卒よろしくお願いいたします。

劇団態変第 65 回公演　新作

翠晶の城

作・演出・芸術監督　金満里

2018 年 1 月 13 日（土）　14 日（日）
AI・HALL（兵庫県伊丹市）

態変が、5 年ぶりの AI・HALL に登場。
<城>というメタファで金満里が描き出すのは、現代人の最も潜在的なテーマ、愛への幻想とそうではない愛。
唯一無二の城である「身体」が「愛」と出会う時、何かが動き出す！！

///// 今後のメタモルホールでの企画 /////

①ダンス研究会 vol2

「振付を考える　金満里とサイトウマコト」
8 月 21 日（月）14 時

「振付」をテーマに、金満里とサイトウマコトが振付について語り、振付の実践・試演を行うことを通じて、身体－振付－作品のプロセスを考えます。
参加費 800 円 定員 30 名 (要予約)

②さなぎダンス企画 #11

9 月 17 日 (日)19 時
18 日 (月祝)13 時 30 分、17 時

3 組のダンサーによる、15 分程度の作品が 3 つ。合間に行なわれるダンス批評も人気の企画。
出演 : 下村雅哉＋渡辺綾乃（劇団態変）　他
一般 : 前売 2000 円、当日 2200 円　障害者及び介助者 ･25 歳以下 1500 円　定員 30 名 (要予約)

会場：メタモルホール
大阪市東淀川区西淡路 1-15-15　JR 東淀川駅 東口 徒歩 3 分

→お申し込み・お問合せは
劇団態変事務所まで

出版物ご案内

情報誌イマージュ Vol.68

特集●
相模原やまゆり園障碍者大虐殺事件を生きる

対談　鵜飼哲×金満里
「奪われて良い命などない！〜優生思想と訣別する」

私たちを震撼させた、２０１６年7月26日未明に引き起こされた障碍者施設での大虐殺事件。私たちの社会は、受難者たちを匿名としたままにさせ、その存在を最初から無かったかのように扱ったままである。この大虐殺事件は、今まさに進行中なのであり、私たちはその真っただ中を生きている、と云ってよいのではないでしょうか。
事件からちょうど一年。広範な分野からのご寄稿を得て組んだ渾身の特集号です。ぜひお手元に。

1冊500円
年間購読1500円
（年3回・送料込）

〈購入方法〉
同封の郵便振替用紙に以下をご記入の上、お振込み下さい。
・振込人住所氏名
・送付ご希望の住所氏名
・電話番号
・メールアドレス（任意）
・物品名　・数量
ホームページにも詳細を掲載しています。

特集への執筆者　順不同・敬称略

坂手洋二（演劇）／岡登志子（ダンス）／今野和代（詩）／山本公成（音楽）
bozzo（写真）／田口ランディ（文学）／朱喜哲（哲学）
石地かおる（リメンバー7.26神戸アクション）／鈴木伸哉（反差別カウンター）
内田樹（思想）／大黒党ミロ（漫画）／中村一成（ルポライター）
ブブ・ド・ラ・マドレーヌ（アーティスト）
うっちー（反差別カウンター）／李信恵（フリーライター）

「劇団態変」の本が出ます。

「劇団態変の世界　〜障害の〝からだ〟だからこそ〜」（仮題）

情報誌イマージュにこれまで掲載された金満里と多くの著名人、表現者、研究者の方々との対話から厳選して、高橋源一郎、松本雄吉、大野一雄、竹内敏晴、マルセ太郎、内田樹、上野千鶴子、鵜飼哲各氏とのものをまとめました。
そして、これまで34年間の劇団態変の活動を簡潔に描き出します。劇団活動34年、イマージュ発行20年の間には、９・１１や３・１１、多くの震災、障碍者をめぐる問題、近くは相模原事件など、さまざまな世の中の動きがあり、金満里の対話はそれらを反映しています。劇団態変の活動の金満里らの言葉を通して、「現代」に鋭く切り込む本書の刊行に、ぜひともご期待ください。

四六判並製、256頁（予定）
予価：2000円＋税
発行：2017年9月